

第6学年〇組 道徳学習指導案

1 主題名 花咲く長所 高学年1－(6) 個性伸長

2 資料名 「宮城道雄」 (文溪堂：6年)

3 指導観

- 本主題は、自分の特徴を知って、よい所を伸ばそうとする態度を養うことをねらいとする。自分の特徴とは、他と比べて特に目立つ点であり、長所だけでなく短所も含むものである。自分の特徴を知るとは、その両面を見いだすことである。個性の伸長とは、自分のよい所を發揮しながら調和のとれた自己形成を目指していくことである。

本資料は、盲目というハンディキャップをもちながら、伝統的な邦楽に斬新な手法や考えを取り入れ、箏の演奏家としてまた作曲家としての地位を確立した宮城道雄の半生を描いた話である。本資料の「宮城道雄」は音楽科の鑑賞教材「春の海」の作曲者である。そこで、音楽科との連関を考え、音楽科の箏の実体験を想起させることで興味をもたせられる資料と考える。宮城道雄を題材にした本資料は、目が不自由であったが自分の特徴に気付き、人一倍努力し自分の能力を伸ばしていった主人公の生き方を実感させることができ、道徳的価値の内面的自覚を促すのに有効であると考ええる。

- 本学級の子ども達は、ほとんどの子どもが、好きなことや得意なことがはっきりしており、スポーツ、絵画工作、楽器の演奏、習字などでは、賞賛される機会も多く自他共に長所や実力を認め合っている。しかし、その事を自分のよい所として気が付いていない子どももいる。事前アンケートにおいても「自分のよい所に気が付いていますか。」の問いに対して「気が付いている・少し気が付いている」と答えた子どもが19人、「あまり気が付いていない・気が付いていない」と答えた子どもは13人という結果で、1/3の子どもが自分のよい所に気が付いていなかった。

そこで、本主題を取りあげることは、自分の特徴に気付き、よい所を伸ばそうとする意欲につながる上で大変意義深い。

- 本時の指導にあたっては、自分の特徴に気付き、よい所を伸ばそうとする意欲につながるために、音楽科の「日本の音楽を味わおう」の学習と連関させて道徳的实践力を高めていきたいと考える。

そのために、導入においては「春の海」を聴き音楽科の学習を想起させたり、目隠しをして箏をひかせる体験を行い資料を身近なものとして感じとらせることで学習の意欲を高めていく。

展開前段では、主人公の決して恵まれたとはいえない境遇の中でやめたいと思った気持ちと、「ぼくには、音楽の道があるんだ。」と気付き希望をもって新たに努力を始めた気持ちを考えさせる。その心境の変化をハート図を用いた活動を通してとらえさせる。

展開後段では、自分のよい所に気付かせるために自分の長所を道徳ノートに書かせる。さらに、友達の良い所を書いた手紙を渡しより多くのよい所に気付かせる。また、そのよい所を伸ばそうとする意欲を高めるために、友達からの手紙を読んで感じたことを書かせる。

終末では、自分のよい所を伸ばしていこうとする意欲をもたせるような教師の説話をする。

4 本時の目標

- 自分の特徴に気付き，よい所を伸ばそうとする意欲につなげる。

5 準備


資料「宮城道雄」，挿絵，道徳ノート，ハート図，箏，短冊，友達からの手紙

6 本時展開

段階	子どもの学習活動	教師の支援活動	目標の達成度を見取る評価基準
導入	1 「春の海」を聴き，音楽の時間に学習したことを思い出し，宮城道雄について話し合う。	※「春の海」演奏を聴かせ，音楽の学習を想起させる。 ※主人公の気持ちに共感的に理解させるため，体験的活動を行う。	○音楽の学習を想起して，発言をしている。 ・作曲者は宮城道雄だ ・盲目の作曲家だ ・日本の伝統文化の箏を使っている ・日本を代表する作曲家だ
	めあて 自分のよい所に気付こう。		
展開前段	2 資料「宮城道雄」を読んで，主人公の心情について話し合う。 (1) 朝鮮に渡り，箏と尺八で生計をたてながら，朝早く箏の練習をしている道雄の気持ちを考える。	※主人公の置かれている状況や心情を捉えやすくするために短冊や場面絵を提示する。 ※主人公の心の揺れに共感させるためにハート図を活用する。	○道雄の特徴を捉えている。 ・目が見えない ・優れた耳を持っている ・音楽に向いている ・箏がうまい ・自然がすき ○朝早く箏の練習をする道雄の気持ちに共感している。
	朝鮮に渡り，箏と尺八で生計を立てながら箏の練習をしている道雄は，どんな気持ちだったでしょう。		・やめたい ・生活を支えながら練習をするのは大変だ
	(2) 「そうだ。ぼくには音楽があるんだ。」と思った時の気持ちを考える。	※自分のよい所を伸ばしていきたいと考えた気持ちに共感できるように道徳ノートに書かせる。	○自分のよい所に気付いて伸ばしていこうとする道雄の気持ちを書いている。 ・音楽しかない ・大好きな自然の音を箏で表現してみよう
	「ぼくには，音楽の道があるんだ。」と考えたとき道雄はどんな気持ちだったでしょう。		・ぼくは，音楽に向いている
展開後段	3 自分の生活をふり返る。	※自分のよい所に気付かせるために，友達からの手紙を読ませる。	○自分の特徴について書いている。 ・音楽得意。友達からも上手と書いてもらって嬉しかった。だから，もっと練習をしてピアノをうまく弾けるようになりたい。
	自分のよい所はどこでしょう。友達からの手紙を読んでどんなことを感じましたか。		
終末	4 教師の説話を聞く。		

7 板書計画

7 宮城道雄



宮城道雄
春の海
冒頭の作曲家
日本を代表する作曲家

めあて
自分のよい所に気付こう。

宮城道雄
少年時代視力を失う
一人倍優れた耳
ことが上手
音楽に向いている
自然がすき

朝鮮半島で生計を立てながら、ことの練習をする時

つらい
やめたい
仕事をしながらの練習は大変だ
朝早くから練習するのは無理だ

「そうだ、ぼくには音楽の道があるんだ。」

音楽しかない
ここでくじけないぞ
音楽をもっと練習しよう
自然の音を音楽で表現できるようにになりたい
自分には、音楽に向いている


「そうだ、自然の音を音楽にするのをめあせう。」


水の姿態・春の海

名曲を演奏

がんばろう

やめたい





努力 目標 気付き 特徴

8 道徳ノート

8 道徳ノート

花咲く長所

めあて
自分のよい所に気付こう。

宮城道雄

◎ 「そうだ、ぼくには音楽があるんだ。」と考えたとき、道雄はどんな気持ちだったでしょう。

月 日 組 名前

◎ 自分のよい所はどんな所ですか。


自分のよい所

友達からの手紙を讀んで感じたこと

この練習をするとき

②

①



9 資料



道雄はそんなことを考えるようになった。

——そうだが、ぼくには、音楽の道があるんだ。

道雄は、こう考え直しては、いっそう音楽の勉強に熱中するのだった。

この練習を続け、熱心に勉強すればするほど、以前、先生が教えてくれた曲をくり返しひくことに満足できなくなってきた。新しい曲を習おうにも、仁川には、教えてくれる先生もいなかった。

いっそも、自分の手で新しい曲を作ろうか……。昔からの形にとらわれない、新しい形の曲を作れたらすばらしいなあ。



道雄が、1935年（昭和10年）に購入した20年間の使用したと、1935年（昭和10年）道雄の注文によって製作された、道雄の自作の「水の変態」にちなんで「道雄」名をよけられた。

これまで、本格的な作曲はしなかった道雄だったが、毎日毎日夢中になってひいては直し、ひいては直して作曲を進めていった。

ついに、曲は出来上がった。曲の題名は、やはり「水の変態」とした。激しく降り注ぐ音や風のありさまが見事に表現されていた。

この曲は、その新しさ、のびやかな美しさで、多くの人々をおどろかせた。それが、十四歳の少年によって作曲されたのだということを知って、人々はさかんにおどろいたのである。

道雄は、この後もさらに音楽家としての勉強を続け、新しい日本の音楽を作るために努力を続けた。道雄の作曲した「春の海」、「秋の調べ」、「孫栗のおどり」などの曲は、特にすばらしい名曲として、今も人々に親しまれている。



27

宮城道雄

（一九〇四年十一月九日 - 一九五二年八月九日）
 宮城道雄は、少年時代、病氣にかかって視力を失った。見える世界を失った道雄は、その代わりにいろいろな音を聞いては、それを楽しむようになった。

宮城道雄は、少年時代、病氣にかかって視力を失った。見える世界を失った道雄は、その代わりにいろいろな音を聞いては、それを楽しむようになった。

——この子は、音楽の世界に向いているのではないだろうか。

道雄の両親は、こう考えてこの先生のところに入門させることにした。

先生の教え方は大変厳しかった。しかし、そのおかげで、道雄のこのうたは、めきめきと上達し、道雄はますます音楽が好きになっていった。

道雄が十二歳のときに、道雄の父は家族とともに朝鮮半島にわたり、新しい仕事を始めた。道雄は、このの修業を続けるために、祖母といっしょに日本に残ることになった。

ところがその父が、思わぬけがをして働けなくなってしまうたのである。十三歳のとき、道雄は、父に代わって一家の生活を支えるため、祖母とともに朝鮮半島の仁川に引っこすことになった。

仁川での生活は、つらいものだった。道雄は、昼はこども、夜は尺八を教える生活を支えた。そして、自分自身のこの練習は、朝早く、家族がまだ起きていない間に起きてやっていた。

そのため、夜になると昼間のつかれで、思わず教えながらいねおりをしていた。まうことさえあった。

そんな道雄をなくさめてくれたのは、自然の豊かさだった。道雄は、特に広々とした海が好きだった。

しかし道雄は、こうした自然の姿を見ることは決してできなかった。その代わり、道雄の一人一息すくれた耳は、人の気つかない自然の中の音を、聞き取り、味わうことができたのだった。

そんなある日、弟の啓二が学校の教科書を声を出して読んでいるのを、道雄はそばで聞いていた。

それは、水がさまざまな姿を変える様子や七つの和歌に作ったものであった。

加にたらこめる露、月をかくす雲、秋の夕暮れに降りしきる雨、冬の夜に降る雪、秋の木の葉に光る露、冬の朝、日かげに冷たくおどりつく霧……。

道雄は、うっとりとして聞き入った。道雄には、それらの水がくり出す、静かな、あるいは激しい音が、まるで聞こえてくるような気がするのだった。

「ああ、すばらしいなあ。」

思わずそうつぶやいた道雄に、啓二はびくりして読むのをやめた。

「兄さん、どうしたんですか？」

「いや、あんまり美しいものだから……。今のは、なんという題なんだい。」

「『水の変態』というんです……。美しい風景ですね。」

「いや、美しい音だよ。ぼくには、美しい景色より、美しい音のほうが感じられるよ。」

「へえ、そうですか。この和歌の中に、音が感じられるとはねえ。」

——そうだ、自然の中にあるさまざまな音……。それを、音楽にすることを、ぼくは目指そう。

道雄は、そう思うとさっそく作曲にかかった。